

[招待論文]

# 人工知能(AI)とロボットがもたらす社会的インパクト: 「ヒューマン・ファースト・イノベーション」に向けて Artificial Intelligence/Robots and Social Impacts: Is Human First Innovation Wishful Thinking?

高橋 利枝<sup>†</sup>

Toshie TAKAHASHI

<sup>†</sup> 早稲田大学 / ケンブリッジ大学

<sup>†</sup> Waseda University / University of Cambridge

## 要旨

本論文の目的は、人工知能(AI)やロボットがもたらす社会的インパクトを理論的かつ経験的に捉えることである。まず理論枠組みとして、これまで理論と経験的調査研究との往還運動を通して発展させてきた「コミュニケーションの複雑性モデル」について紹介をする。次に、AIやロボットに関する日本と西欧の差異についてアプローチしていく。両者の差異に関しては、これまで思想や宗教的な観点から主に多く説明されてきた。そのため本稿では、ケンブリッジ大学との共同研究「グローバル・AIナラティブ」プロジェクトから、1920年代以降のAIナラティブについて社会経済的な力学から考察を試みたいと思う。さらに人とAI/ロボットとのエンゲージメントに関する実態について、現在行なっている2つの調査研究-若者とAI調査、高齢者のロボット・エンゲージメントから考察する。最後に今後のAI/ロボット開発において必要な「ヒューマン・ファースト・イノベーション」について提案したいと思う。

## Abstract

The aim of this paper is to understand the social impact of Artificial Intelligence (AI) and robots both theoretically and empirically. Firstly, I introduce the theoretical framework I have developed for a deeper understanding of the social impact of AI and robots. Secondly, in order to address the differences between Western and Japanese perceptions and engagement with AI and robots, I demonstrate AI narratives within Japanese historical and social contexts since the 1920s. This work is done in collaboration with the Global AI narratives project at the Leverhulme Centre for the Future of Intelligence, University of Cambridge. Thirdly, I investigate Japanese engagement with AI and robots using the results of both qualitative and quantitative research. I introduce my two on-going projects, firstly “Youth and AI” project and secondly “Robots Engagement” project. Finally, I give some suggestion which I call “Human First Innovation” regarding the future of this field. I hope this study could help to create a better AI society together beyond techno-orientalism within the dichotomy between the West and the Rest.

## 1. 序「なぜ日本人はロボットが好きなのか?」: 国際会議で体験した西欧からの批判

2016年11月香港、ハーバード大学の「インターネットと社会」研究所がアジアにおける人工知能(AI)の動向を捉えるために設立した「デジタル・アジア・ハブ」の1周年記念行事が行われた。ビクトリアハーバーの美しい夜景をのぞむ香港海事博物館で「AI in Asia(アジアにおける人工知能)」の第1回ワークショップが無事に終わり和やかに懇談していると、突然イタリアとスペインの研究者たちに話しかけられた。

「日本人はなんでロボットが好きなの? 私たちヨーロッパ人は、日本人とは違ってロボットには抵抗がある。アイボのようなロボットのペットは考えられない。」

この時から彼らの問いは、私自身の問いとなった。

2017年8月リスボンにてロボットの国際学会 RO-MAN2017 が開催された時、再び同じような体験をした。イタリアのサンターナ大学院大学の法学者アンドレア・ベルトリニ(Andrea Bertolini)が、「アイボ・ロス」に対して、痛烈な批判を投げかけてきたのである。

「ロボットは単なるモノ(just a thing)ではないか。子供ならともかくいい大人がロボットに夢中になったりして、日本人は大丈夫か? …僕は日本人の事を心配するよ。」

人間が単なる「モノ」であるロボットに対して親密性を抱くのはおかしいというのである。

このような国際学会で私が経験した西欧から日本への批判は、単なる個人的な印象や学術的な議論に

---

[招待論文] 2019年2月6日受付, 2019年2月25日受理

© 情報システム学会

留まるものではない。AI時代における政策やビジネスにおいても、私たちの知らないところで多大な不利益を被る危険性を秘めているのである。

2018年4月、ブリュッセルの欧州議会より「ロボット経済圏」に関する国際会議に招聘された。この国際会議の主催者であるマディ・デルヴォー(Mady Delvaux)議員は、以前受けた自身のインタビューの中で次のように答えている[1]。

「ロボットは人間ではないし、決して人間になることはないことを絶えず人々に啓蒙し続けていかなければなりません。…私たちは日本にある人間のようなロボットは欲しくないのです。ロボットは人間を情緒的に依存させるべきではないという憲章の制定を提案しました。物理的な労働に関して私たちはロボットに依存することはできますが、ロボットが人間を愛するとか自分の悲しみを感じてくれるなどは、決して考えるべきではないのです。」

デルヴォー議員をはじめ欧州議会は、ネットワークにつながれた自律的なロボットによって形成される未来社会に対して、世界に先駆けてルール作りを行いたいと考えている。米国や日本などのロボット先進国が未だ公的な規制を確立していないため、EUに有利な規制を作成し、イニシアチブをとるチャンスだと捉えているのである。この会議ではブロックチェーンやIoR(Internet of Robots)などによる人間不在のロボット経済圏の創出や、自動運転車の責任の所在、ロボット兵器に対する恐怖など、様々な問題点が指摘された。

しかしながら、これらの一連の批判に対して、次のような疑問が湧いてくるのである。そもそも日本人は本当にヒューマノイドが好きなのだろうか？私たちはロボットに愛されたいと思っているのだろうか？実際に消費者はどのようなAIやロボットを必要としているのか？日本人と西欧人とはAIやロボットに対してどのように異なっているのか？その理由は何であろうか？

本稿ではまずAIやロボットがもたらす社会的インパクトを捉えるための理論枠組みとして、これまで私が理論と日英米における国際比較研究との往還運動を通して発展させてきた「コミュニケーションの複雑性モデル」について簡単に紹介をする。その上で、AIやロボットに関する日本と西欧の差異についてアプローチしていく。両者の差異に関しては、思想や宗教的な観点（例えば、西欧のキリスト教に対する東洋の儒教、日本におけるアニミズムやテクノアニミズムなど）から主に多く説明されてきた[2][3][4][5]。そのため本稿ではケンブリッジ大学との共同研究「グローバル・AIナラティブ」プロジェクトから歴史的・社会的文脈とともに考察を試みたいと思う。さらに実態を捉えるために、現在行なっている若者や高齢者に対する経験的調査研究から人間とAIやロボットのエンゲージメントについて考察していく。最後に今後のAI/ロボット開発において必要な「ヒューマン・ファースト・イノベーション」について簡潔に述べたいと思う。

## 2. 「コミュニケーションの複雑性モデル」：AIがもたらす社会的インパクトを捉える理論枠組み

### (1) Society5.0と複雑系のパラダイム

現代社会を捉えるキーワードの1つとして、Society5.0がある。Society5.0とは「狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続くような新たな社会を生み出す変革を科学技術イノベーションが先導していく」社会のことである<sup>[6]</sup>。第4次産業革命という言葉が表すような単なる産業革命ではなく、文明の転換期、ターニングポイントとしてSociety5.0という言葉が使われている。すなわちAIやIoT、IoRなどが日常生活のあらゆる場面に入り込み、サイバー空間とフィジカル空間(現実世界)とが融合された「新たな社会へのパラダイムシフト」を意味している。そのようなSociety5.0における社会のパラダイムシフトは、どのように捉えることができるのだろうか？

社会学者や自然科学者は既存のパラダイムでは観察することの出来なかった、あるいは例外とされ捉えることの出来なかった、複雑で動的な現象を捉え、説明力を加えるために「複雑系」のパラダイムを用いている。複雑系のパラダイムは数学や物理学、生物学など自然科学の分野から創発し、経済学や社会学など多くの社会科学においても既に応用されている<sup>1</sup>。

複雑系のパラダイムがなぜ必要なのか、社会学者の今田高俊は次のように述べている。

<sup>1</sup> カオス理論やフラクタルは数学における複雑系のパラダイムの例として有名である。物理学においては自己組織性や相転移などの非線形力学、生物学においては自己適応性や自己複製性などの発見がある。経済学においては限定合理性や収穫逓増、社会学においてはオートポイエーシスや自己組織性などがあげられる。

「複雑系の科学とポストモダン論は世界の秩序説から混沌説へのコペルニクス的転回を促進するパラダイムであり、カオスの縁から近代文明を問い直し、来るべき新たな文明への自己組織化を見通す視座を与えてくれる。」<sup>[7]</sup>

## (2) AI 社会と「コミュニケーションの複雑性モデル」

AI と人間、社会に関しても、例えば、情報学者である西垣通<sup>[8][9]</sup>はオートポエシス理論を含むネオ・サイバネティカルな観点から、また、経済学者である須藤修<sup>[10]</sup>は社会システムの自己組織性の観点から、それぞれ鋭い考察を行っている。筆者も数学科出身というバックグラウンドから、これまでメディア・コミュニケーション学の分野において複雑系のパラダイムを用いて「コミュニケーションの複雑性モデル」<sup>[11][12][13]</sup>を発展させてきた。

「コミュニケーションの複雑性モデル」は、スマート化やグローバル化による社会変容という今日の複雑な社会的文脈において、個人、社会集団、文化の複雑性や動態性を理解するために提示した統合的な理論モデルである。複雑系のパラダイムから4つの概念—相互作用、自己組織性、適応的、カオスの縁—を用いている。ミクロとマクロの間には多数の複雑なシステムが存在し、相互に結び付き、各々動的に相互作用しあっており、それぞれを切り離して理解することは出来ない。私たちは家族や仲間、同僚や、地域社会など重層的な社会集団の成員として日常生活を送っている。個人は様々な社会集団の中に、また社会集団は文化の中に入れ子状態になっており、絶え間ない相互作用とフィードバックによって密接に影響を及ぼし関係しあっているのである(図1)。

文化人類学者のアルジュン・アパデュライ(Arjun Appadurai)は「私たちが問いかけていかなければならないのは、複雑で重層的かつフラクタル的な形態が、どのようにして(大規模であったとしても)単純で安定的なシステムを構成しているのかということではなく、その力学の正体そのものなのである」

(斜字体は筆者)<sup>[14]</sup>と述べている。そこで本稿では、図1の重層的で動的なCGイメージを用いて、マクロレベル( $Z_n$ )の力学( $\alpha_1$ : ナショナリズム,  $\alpha_2$ : グローバル化/西欧化,  $\alpha_3$ : コミュニケーション革命)から、AI がもたらす社会的インパクトについて捉えていきたいと思う。

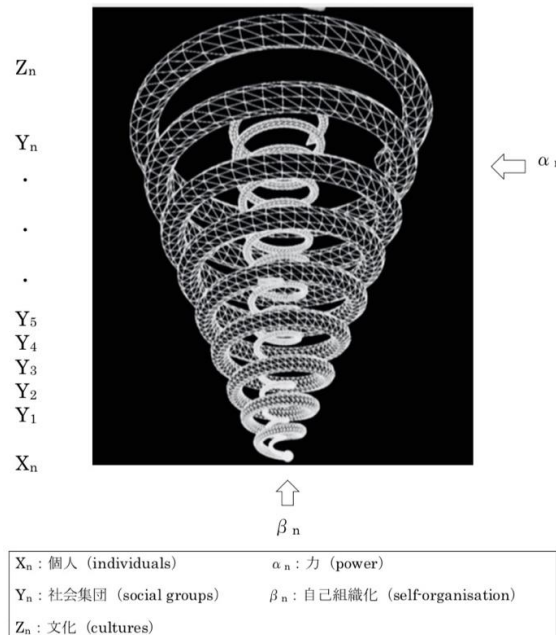


図1 コミュニケーションの複雑性モデル<sup>2</sup>

国家戦略である「Society5.0: 超スマート社会」の実現のため、現在 AI や IoT, AR や VR など社会の

<sup>2</sup> 図像デザイン協力: 東京大学名誉教授河口洋一郎氏

スマート化( $Z_n, \alpha_3$ )の力学が強力に働いている。科学技術イノベーションは、日本ばかりでなく、米国やドイツをはじめ、世界規模で推し進められ、グローバル化は、今後ますます加速しその影響力が強まっていく ( $\alpha_2$ )。その一方で、AI 開発に関する国際競争の激化は、国家間の軋轢を生み、自国の利益を最優先にするためのナショナリズムも高揚している ( $\alpha_1$ )。ドナルド・ジョン・トランプ(Donald John Trump)大統領の「アメリカ・ファースト」や中国の強力な AI 国家戦略、EU の規制に関する動きもナショナリズム、あるいはリージョナリズムの例としてあげられる。このようなマクロレベル ( $Z_n, \alpha_3$ ) の力を受けて、私たちが暮らす地域社会や、会社や学校、より小さな単位の社会集団である家族や友人との仲間ウチの相互作用において、スマート化が進められていく ( $Y_n, \alpha_3$ )。そして重層的な社会集団の成員である私たち個人の日常生活も、徐々に(あるいは一気に)スマート化されていくのである( $X_n, \alpha_3$ )。

しかしながら、社会のスマート化は、マクロレベルからのトップダウンの一方向的な流れではなく、人々の相互作用やエージェンシーによるミクロレベルからのボトムアップな流れと共に進められていく ( $X_n, \beta_n$ )。例えば、AI サービスを用いたソーシャルメディアやスマートフォン、グーグル・ホームやアマゾン・エコー、コミュニケーション・ロボットなど人々との日常生活における相互作用を通して、社会集団、そして社会のスマート化が進められていくのである( $X_n, Y_n, Z_n, \beta_n$ )。

すなわち言い換えるならば、いかに優れた科学技術が開発されたとしても、人々の信頼が得られなければ、社会的なインパクトを与えることは出来ないのである。例えば、遺伝子組み換え作物は米国では成功しているにも関わらず、英国では人々の信頼を得ることができずに失敗に終わったという歴史がある。そのため、英国議会の人工知能委員会の委員長であり、自由民主党上院答弁担当者のクレメント・ジョンズ卿(Lord Clement Jones)は、AI 技術に対して人々の信頼が得られるようなナラティブを構築する必要があるという<sup>3</sup>。なぜならば英国では、メディア作品における AI による人類滅亡というナラティブの影響を受けて、AI に対してネガティブな印象を持っていると考えられているからである。歴史的にみると、西欧ではオートマトンやロボットは奴隷として描かれおり、オリエンタリズムによって「他者」である東洋人がモチーフとして用いられていた(後述)。しかしながら、世界的に大ヒットした映画「ターミネーター」では、西欧社会における特権階級である「容姿端麗な白人男性」が表象されているため、AI による征服という構図が現実味を帯び、人々に多大な衝撃と恐怖を与えているというのである<sup>[15]</sup>。このような背景から、クレメント・ジョンズ卿は「『AI は奴隷であり、私たち私的主人ではない』という事を確実にするために、国際的に政府間で共通の合意を構築する必要がある」と述べている<sup>[16]</sup>。

### 3. AI ナラティブ: 「AI に対する信頼」プロジェクト

今日の第3次 AI ブームにおいて、AI は期待と恐怖の2項対立で語られている。このような2項対立による過度な期待は再び AI バブル崩壊を招く一方で、AI に対する過度の恐怖は人々の信頼を得ることができず、結果私たちは優れた科学技術の恩恵を受けることが出来ないという帰結を招く。そのため私たちが現在客員研究員として所属しているケンブリッジ大学の AI 研究所である「知の未来」研究所(CFI)は、国連「AI for Good」(ITU)グローバルサミットの4つ具体的な政策プロジェクト<sup>4</sup>のうちの1つである「AI における信頼」を担当している。以下では、ケンブリッジ大学との国際共同研究「グローバル・AI ナラティブ」プロジェクトから日本におけるナラティブをマクロレベル ( $Z_n$ ) の力学 ( $\alpha_1$ : ナショナリズム,  $\alpha_2$ : グローバル化/西欧化,  $\alpha_3$ : コミュニケーション革命) と共に見て行きたいと思う。

#### (1) 「學天則」: 西欧からのオリエンタリズムへの抵抗 ( $Z_n$ )

1958年11月24日に英国で初めてAIの国際会議が開催されたことを記念して、2018年11月29日、30日両日ケンブリッジ大学(CFI)主催の「人工知能の歴史 (History of AI)」が開催された。AIに関する文化帝国主義の批判に答えて、歴史学者サイモン・シャファー(Simon Schaffer)は「オートマトンの歴史はオリエンタリズムの歴史と密接に結びついている」と指摘した。オートマトンは奴隷として表象され、「それ故トルコ人がモチーフとして描かれている」と述べている。それでは、西洋からのオリエンタリズム ( $\alpha_2$ ) に対して、日本はどのように適応したのだろうか？

1920年チェコスロバキア、カレル・チャペックの戯曲 R.U.R. の中でロボットという言葉が誕生した。この戯曲は、日本では1923年に東京朝日新聞紙面で最初に紹介された後、翻訳書の出版、劇場での上

<sup>3</sup> 2019年1月17日、英国ロンドンの貴族院で行なった筆者のインタビューに応じて。

<sup>4</sup> 国連「AI for Good」(ITU)グローバルサミットは、2018年5月15日から17日までジュネーブで開催され、以下の4つ具体的な政策プロジェクトが立案された。「AI+サテライト」、「AI+健康」、「AI+スマートシティとコミュニティ」、「AIにおける信頼」。

演などが行われた。井上春樹の「日本ロボット創世記」<sup>[17]</sup>によると、人間とロボットとの関係は、西欧と東洋という暗示された序列ではなく文字通り資産家と労働者階級の関係として捉えられ、当時の日本の労働争議の文脈の中で人々の共感を得ていたという。「つまり、『R.U.R』は、地球規模でロボット＝労働者、人間＝資本家という構図でとらえられていたことになる」<sup>[18]</sup>。

しかしながら 1928 年、日本（アジア）で初めてヒューマノイド「學天則」を製作した西村真琴は、カレル・チャペックの R.U.R におけるロボットが人間を破壊するというネガティブなナラティブを憂慮して次のように述べている。

「現在西洋で作り出すもののように仕事をさせたり遊戯の仲間入りをさせたりするばかりでは、それ等の人造人間が数多くなるにつれて、彼のカレル・チャペックの戯曲ではないが、遂には人造人間のために人間が征服されるような変態の世の中が現れて来ることは想像するに難くない。

つまり物質文明の極は、その文明によって人間が亡ぼされてしまうということを諷刺している。この意味において便利主義一点張りの奴隸的人造人間の出現については驚きの一面に、この天地の傑作である人間を真似作る時の態度として物足りなくはないか、もっと聴衆を考慮して尊い理想をその人造人間に打ち込んで作って欲しい。」（原文は旧仮名遣い）<sup>[19]</sup>

西村は學天則を製作した理由として次の 2 つを述べている。まず第 1 に、海外に対して日本の文化と日本人の理想の姿を見せるため、第 2 に国内に対しては、行き過ぎた西欧化に対して日本のナショナリズムを高揚させる「思想善導に資すべきものとして企てられ作り上げられたのである」<sup>[20]</sup> ( $\alpha_1$ )。

コロンビア大学で植物学の修士号と博士号を取得した西村は、米国やロシアによるアジアの植民地主義 ( $\alpha_2$ ) に対して厳しく批判しており<sup>[21]</sup>、學天則の顔は西洋と東洋人の特徴を合わせる事によって人種差別を超越している。このように西村は、西欧からのオリエンタリズム ( $\alpha_2$ ) に対抗し、ナショナリズムを高揚させるとともに ( $\alpha_1$ )、新たなコスモポリタンのシンボルとして學天則を創造したのである。

## (2) 鉄腕アトムと東京オリンピック (Zn)

西欧に対する日本のナショナリズムがピークに達した後 ( $\alpha_1$ )、第 2 次世界大戦に突入し、日本はカオスに陥る。學天則が作られた年に生を受けた手塚治虫は、大阪大空襲と 8 月 15 日が自身のマンガの原点であると記している<sup>[22]</sup>。そして 1951 年、カオスの中から「アトム大使 (のちに鉄腕アトム)」が誕生する。「鉄腕アトム」は、1963 年から国内初のテレビアニメとして放送され、技術革新による人間の幸福のシンボルとして、人々に受容されていった ( $\alpha_3$ )。

しかしながら、手塚は鉄腕アトムのテーマは「生命の尊厳」であると主張し、次のように述べている。

『鉄腕アトム』がぼくの代表作と言われていて、それによってぼくが未来は技術革新によって幸福を生むというビジョンを持っているように言われ、大変迷惑しています。アトムだって、よく読んでくだされば、ロボット技術をはじめとする科学技術がいかに人間性をマイナスに導くか、いかに暴走する技術が社会に矛盾をひきおこすかがテーマになっていることがわかっていただけたと思います。しかし、残念ながら、10 万馬力で正義の味方というサービスだけが表面に出てしまって、メッセージが伝わりません。」<sup>[23]</sup>

戦時中、絶えず死と隣り合わせであった手塚は、戦後も医師として患者の死と直面しており、「科学技術とそれによる社会構造に疑問を持って」いたという<sup>[24]</sup>。手塚が鉄腕アトムに込めたメッセージは、1960 年代、70 年代の高度成長を促進するために、支配的なイデオロギーによって「システムティックに歪曲されていった」<sup>[25]</sup> ( $\alpha_1$ )。1964 年の東京オリンピックは「科学のオリンピック」と呼ばれ、世界にハイテク国家として第二次世界大戦からの見事な復活を印象付けた。1950 年代、60 年代に鉄腕アトムによって影響を受けた世代は、高度成長を牽引し、1980 年代には、日本はロボット大国となり、産業用ロボットで世界 80% シェア以上までになった<sup>[26]</sup>。そして再び現在、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、コミュニケーション革命の力学 ( $\alpha_3$ ) が強化されている<sup>5</sup>。

このように西欧諸国によるアジアに対する植民地主義やオートマトンに内包されたオリエンタリズムなど、西欧からの力学 ( $\alpha_2$ ) に対抗し、鉄腕アトムに代表される日本における AI ナラティブは、ナ

<sup>5</sup>例えば、2014 年に総務省が提示したスマート・ジャパン ICT 戦略では、「世界で最もアクティブな国になる - ICT によるイノベーションで経済成長と国際貢献を」ミッションとして掲げている。また、アクションとしては、「2020 年東京オリンピックで世界最先端の ICT 環境の実現」が掲げられている。

ショナリズムを高め、戦後の復興を推し進めたと言えよう<sup>[27]</sup>。強力な媒体であるテレビ放送によって、鉄腕アトムやドラえもんは、戦後人々に広く愛され、ロボットは、愛情や心を持ち、人間を助け、共存するポジティブなイメージを与えてきたのである。

#### 4. 若者と AI 調査 (Xn)

スチュアート・ホール(Stuart Hall, 1980)は「エンコーディング/ディコーディング・モデル」<sup>[28]</sup>において、エンコーディング(マス・メディアの意味づけのプロセス)とディコーディング(オーディエンスの解読のプロセス)の間の非対称性について考察している。それでは、マス・メディアによって意味付けられた AI ナラティブは、現在どのようなインパクトを及ぼしているのだろうか？ 私が 2018 年夏に行なった若者に対する AI 調査<sup>6</sup>から考察したいと思う。AI やロボットのイメージについて聞いたところ、72.6% の若者がポジティブと答えた。また AI やロボットと聞いてイメージするキーワードとして、1 位から 4 位までがポジティブなイメージ(「期待」68.6%、「便利」64.7%、「未来」60.7%、「革新」55.4%)、5 位にネガティブなイメージの「脅威」(41.5%)を、そして、6 位に再びポジティブなイメージ「共存」(37.6%)をあげている。

しかしながら、AI やロボットに対して、60% がヒューマノイドの形状を望まず、67% が人間と同じような「感情、心」を持つことを望まず、84% が自我を持ち人間の予想を超える行動をすることを望んでいない。この理由として「気味が悪い」や「人間と区別すべき」、「ロボットによる人間の支配」や「生命の絶滅」に対する恐怖などと記述している。現代の日本の若者たちは、ロボットに対するイメージとして、鉄腕アトムよりもドラえもんやターミネーターをはるかに多く思い浮かべている。さらに、メディア作品ばかりではなく、Twitter などのソーシャルメディアや日常生活におけるロボットとの直接的経験からも多大な影響を受けている。例えば、ある女子大生は、アルバイトの帰りに夜遅く商店街を歩くと、暗い店の中でガラス越しにうな垂れているペッパーが怖いという。このように現代では、AI やロボットに対する認識や嗜好性、信頼は、日常生活における直接的経験とメディア経験の両方から構築されていると言えるだろう。

#### 5. ロボット・エンゲージメント (Yn)

先に紹介したケンブリッジ大学主催の「AI の歴史」において、60 年間にわたって AI 研究の動向を見続けてきたマーガレット・ボーデン(Margaret A. Boden)は、私たちが越えてはいけないう一線として、「日本が巨額の資金を投資して推し進めているような介護や孤独な人のケアを AI やロボットにさせるべきではない。人間の尊厳を守るべきである」と主張した。ボーデンは、サセックス大学にて世界初の認知科学の学部創設に貢献し、AI を医学、哲学、心理学などと学際的に研究している AI 研究の第 1 人者である。ボーデンの発言に賛同し、ディープマインドのマリー・シャナハン(Murrey Shanahan)も、「AI システムは人間と惑わされるような表象をされるべきではない」という EPSRC による AI/ロボット原則に言及した。

それでは実際に日本の介護現場では、どのようにロボットが利用されているのだろうか？ 特別養護老人ホームで私が行った高齢者とロボットのエンゲージメントに関するフィールドワークから考察したいと思う<sup>7</sup>。この施設では、パロやアイボ、ペッパーなどのコミュニケーション・ロボットや、介護用マッスルスーツやロボットスーツなどの介護支援用ロボットなど、積極的にロボットの導入・利活用を行っている。各フロアには個室の他に共有スペースが設けられており、認知症の高齢者は、昼間眠ると夜眠れなくなるため、昼間は共有スペースで一緒に過ごしている。私たちが訪問した時には共有スペースには同じフロアの 5 名がおり、ロボットを使用する前と使用している時間を長時間にわたって観察を行った。

ロボットを使用する前は、お互いあまり話をする事もなく、それぞれがテレビを見ていたり、本を読んでいたり、ただ宙を見たりしながら、静かな時を過ごしていた(写真 1)。

しばらくして職員がパロとアイボを持ってきてテーブルの上に置くと、この光景は一変する。目の前で動いたり鳴いたりするアイボやパロに驚いたような表情を見せながらも、ロボット達に話しかけたり、

<sup>6</sup>調査方法は、10 代から 20 代の若者 60 名に対して 2 時間の詳細なインタビューを行った。その後これらのインタビュー調査で得られた知見を参照して、2018 年 8 月、若者 354 名(15 歳から 29 歳まで；平均年齢 21.3 歳；男性 48%、女性 52%)を対象としたウェブ調査を行った。

<sup>7</sup>フィールドワークは 2018 年 2 月 2 日、産業技術総合研究所ヒューマンライフテクノロジー研究部門上級主任研究員の柴田崇徳教授とともに、社会福祉法人シルバーウィングで、インタビュー調査や参与観察を行った。



撫でたり、可愛がったり、フロアにはたちまち笑顔があふれた。そして時間の経過とともに最初の興奮は収まり、中にはロボットとのコミュニケーションに飽きてしまった人もいた。

しかしながら職員が来て隣に座ると、パロを抱いたり、撫でたりしながら、嬉しそうに職員と話を始めた。この光景は、高齢者ばかりでなく、職員にとっても幸せな時間のように映った（写真2）。



写真1. ロボット使用前の様子



写真2. ロボット使用後の様子

「職員が笑顔になることも大きな効果です」と関口ゆかり施設長はインタビューに答えてくれた。

フィールドワークを終えて、「人間は健康で自立していれば幸せというわけではない。」という石川公成理事長の言葉が最も印象的であった。私たちは、身体の問題一すなわち歩いて自立できること一ばかりに目が奪われがちであるが、たとえ歩けるようになって心の問題が大切だということである。

暗くなってしまうがちの介護の現場で、コミュニケーション・ロボットを導入することの意味は、ボーデンが非人道的と批判しているような、ロボットに介護を任せるのではなく、介護される側と介護する側の両方の心を癒すことによって緊張関係を緩和し、媒介（メディア）として両者の心を結びつけることではないだろうか？このようなAI時代における人間の幸福に関する問題は、AIの導入による失業やベーシックインカム、人間強化(Human Enhancement)や人間拡張(Human Augmentation)など、人生100年時代に向けた議論において、今後最も重要なテーマの1つとなるだろう。

## 6. ヒューマン・ファースト・イノベーションに向けて

AIやロボットはネットワークでつながれ、地球環境問題などと同じようにグローバルな問題となっている。そのためまさに現在、各国やEU、国連などで、ガイドラインや規制、倫理などの議論が活発に行われている。これまで日本と西欧との差異は、宗教の違いや「テクノアニミズム」<sup>8</sup>などから説明されてきた。しかしながら両者の差異を過度に強調することによってステレオタイプ化された日本人論は、オリエンタリズムを再構築してしまう危険性がある。そして、グローバル化においてホールが批判した

<sup>8</sup> テクノアニミズムに関して、近年、西欧の日本研究においても批判的な考察がされている。例えば、Gygi, F., "Robot companions: The animation of technology and the technology of animation in Japan". In: Astor-Aguilera, Miguel and Harvey, Graham (eds.), "Rethinking Relations and Animism: Personhood and Materiality," Routledge, 2018, pp 94-111 など。

「西欧とその他(the West and the Rest)」<sup>[29]</sup>という2項対立が、AI時代において再構築され、両者の対話や協働を難しくする恐れがある。

そのため本稿では、筆者が経験した国際会議における西欧からの日本批判を受けて、日本と西欧とのAIやロボットに関する差異について、社会経済的な力学によって構築されたAIナラティブから説明を試みた( $Z_n, \alpha_i$ )。そして社会的インパクトを考察するため、個人( $X_n$ )及び社会集団( $Y_n$ )におけるAIやロボットとの相互作用について、若者に対するAI調査や特別養護老人ホームでのフィールドワークから考察してきた。これらの考察を経て、最後に「ヒューマン・ファースト・イノベーション」を提案したいと思う<sup>9</sup>。以下では、3つの重要な要素であるヒューマン・ファースト、クロスディシプリン、スマートウィズダムについてそれぞれ簡潔に述べたいと思う。

2017年3月6日、7日両日、冒頭で紹介した「AI in Asia (アジアにおける人工知能)」の第3回シンポジウムをハーバード大学と共に企画し早稲田大学にて開催した。「AI for Social Good (社会の課題を解決したり、社会をよくしたりするための人工知能)」と題した国際シンポジウムでは、「AI化された社会を生かすために必要なものとは～2020年、2030年に向けて、今私たちに求められていること～」をテーマとして、ハーバード大学やオックスフォード大学を始めとする国内外の第一線の研究者を招き、来たるべき「AI化された社会」に向けて議論を行った。そしてAIは人間によって与えられた目的を果たすための手段を最適化していく道具であることを再確認した。すなわちAIファーストではなく、人間の尊厳を守り、人間にとって幸せな社会を作るためにAIを利活用する「ヒューマン・ファースト」なアプローチが必要となる。

さらに国連「AI for Good」グローバルサミット(前述)においてITU電気通信標準化副局長(TSB)のラインハルト・ショール(Reinhard Scholl)は、「AIは様々な開発目標を達成するための道具にすぎない(just a tool)。そのためAIに関する特定の開発目標が必要なのではなく、AIはSDGsの全ての開発目標にインパクトを与えていくものである」と指摘した。私たちが持続可能なグローバル社会を創造するためには、自国の利益を第一に追求する「ネーション」ファーストではなく、国連が目標としている全ての人類のためという意味での「ヒューマン」ファーストでなければならないであろう。

このようなヒューマン・ファーストなイノベーションを起こすためにはどうしたらいいのだろうか? スタンフォード大学工学部前学部長のジェームス・プラマー (James D. Plummer)<sup>10</sup>やハーバード大学応用物理学部長のエリック・マズル(Eric Mazur)<sup>11</sup>は、今日の科学技術がもたらす社会的インパクトの大きさから、人文社会科学の重要性を示唆している。そして実際にスタンフォード大学では、2018年に「人間中心のAIイニシアチブ(HAI)」を立ち上げ、AIに関する学際的なプロジェクトに対して各7500ドルの研究費を支給すると共に、哲学や倫理、ポリティクスなど多様なコースを開講している。例えば、AIとジェンダーに関するプロジェクトを率いる科学史家のロンダ・シーブンジャー(Londa Schiebinger)は、現在の人種やジェンダーのバイアスがかかったデータセットを用いたアルゴリズムに関する問題を解決するために、学際的チームの結成を推奨している。さらに現在アップルなどの企業で用いられている多様性のアプローチでは不十分であり、社会科学による調査結果を技術者にきちんと教える必要があると指摘している<sup>12</sup>。またロボット工学の権威パオロ・ダリオ(Paolo Dario)も、将来のロボット開発はロボット研究者自身の興味や関心で作るのではなく、社会の問題解決のためのロボットが必要と指摘した<sup>13</sup>。このようにAIやロボットの開発において自然科学と人文社会科学の壁を超えたクロスディシプリナリーなアプローチが求められている。

AIがもたらす最大のリスクの1つは失業問題であろう。ユハヴァル・ノア・ハラリ(Yuval Noah Harari, 2018)は、膨大な「無用者階級」の創出の危険性を指摘し、AI時代において「人間が取り残されないた

<sup>9</sup> 「ヒューマン・ファースト・イノベーション」は、人間にとって幸せなAI/ロボット社会を創造するために、2017年12月7日総務省の情報通信審議会情報通信政策部会IoT新時代の未来づくり検討委員会産業・地域づくりWGにて提案し、その後、ジュネーヴの欧州議会(“Economy of Robot” 2018年4月)やロンドンの在英日本大使館(“Japan UK Technology and Humanity in Education” 2019年3月)などで提案した。

<sup>10</sup> 2017年5月サンフランシスコで開催されたIEEE Vision, Innovation, Challenges Summitの基調講演にて示唆された。

<sup>11</sup> 2017年9月京都で開催された科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)にて示唆された。

<sup>12</sup> 2019年2月19日、20日ケンブリッジ大学(CFI)主催の「AIとジェンダー」にて示唆された。

<sup>13</sup> 同STSフォーラムにおけるパオロ・ダリオ(Paolo Dario)主催のワークショップ「ロボットと自律的システム」における議論の結論として提示された。



めには、一生を通して学び続け、繰り返し自分を作り変えるしかなくなるだろう。大多数とは言わないまでも、多くの人間が、そうできないかもしれない。」<sup>[30]</sup>と述べている。そこで最後に「自己創造(self-creation)」の概念をあげたいと思う。「自己創造」という概念は、これまで20年間にわたり私がフィールドワークで出会ったインフォーマントたちの独創的な自己形成の特性に対して、アンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens)の「自己アイデンティティ(self-identity)」<sup>[31]</sup>、ジョン・トンプソン(John Thompson)の「自己形成(self-formation)」<sup>[32]</sup>、ホルの「アイデンティフィケーション」<sup>[33][34]</sup>の概念を参照しながら提示し、発展させてきた概念である<sup>[35][36][37][38][39][40][41][42]</sup>。ここでは、「自己創造」とは「グローバルなAI環境の中で、直接的(non-mediated)経験と媒介された(mediated)経験(例えば、デジタルメディアやソーシャルメディア、AI、ロボット、VR、AR、IoE(Internet of Everything)などとの相互作用)を通じて、再帰的に自己を創造、再創造するプロセス」と暫定的に定義づけられよう。

拙著「デジタルウィズダム」の中で、「今日の変動の世界を生きていくためには、適応性(応化、抵抗、流用)が必要不可欠である」<sup>[43]</sup>と述べた。今後さらにAI環境に適応しながら、絶えず再帰的な自己の創造/再創造が必要不可欠となるだろう。前述の若者とAI調査では、「AIやロボットの技術進化に伴う社会変革について」、自分なりに活用して受け入れると答えた人が46%、積極的に受け入れると答えた人は38%、仕方ないものとして受け入れると答えた人は13%、受け入れないあるいは抵抗すると答えた人は3%であった。すなわち51%が(積極的ないし消極的に)受け入れると答え(応化)、46%の若者が自分なりに活用して受け入れる(流用)と答えている。AI時代に求められているのは、単なる応化や抵抗ではなく、自己実現のためにAIや科学技術を「流用」していくことであろう。

本稿で試みてきたように、「社会的存在」である人間が自身を取り巻く歴史的・経済的・社会的な力学を理解することは、とりわけ今日の変動する社会において、新たな自己を再帰的に創造するために重要である。なぜならば、AI時代に取り残されないために、私たちはAIがもたらす新たな機会とリスクについて学び続けなければならない。そして新たな機会を最大に享受して、リスクを最小にして自己実現をするための「スマートウィズダム」を身につける必要があるからである。そのようなAI時代を生きる叡智を兼ね備えた個と個がつながり、相互作用することによって $(X_n, \beta_n)$ 、新たなコミュニティ $(Y_n, \beta_n)$ 、新たな社会 $(Z_n, \beta_n)$ が創発する。「コミュニケーションの複雑性モデル」(図1)の2重らせん構造が描く上からの力と下からの力の動的な相互作用によって、自己、社会集団、社会は再帰的に創造、再創造されていく。このようなマクロとミクロとのフィードバック・ループによって、社会は自己組織化し、パラダイムシフト(Society5.0)が起きることが考えられるのである。

社会学者アンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens)は、コスモポリタンの文化が際立たせてきた差異を解消するためには、「暴力」か「対話」の2者択一であるとしている<sup>[44]</sup>。AIやロボットを巡るオリエンタリズムによる「西欧とその他」という2項対立を超えて、真に日本がグローバル世界において技術先進国としての役割を果たすための「対話」はまだ始まったばかりである。人間中心の情報システム構築のためには、技術オリエンテッドではなく、手塚治虫が本当に伝えたかった「生命の尊厳」を私たちは決して忘れてはならないだろう。

## 謝 辞

本稿に関する調査研究の実施にあたり、公益財団法人電気通信普及財団より貴重なご支援をいただきましたこと深く感謝いたします。また本稿の執筆にあたり、情報システム学会砂田薫編集委員および学会関係者の皆さまに心より感謝いたします。

## 参考文献

- [1] European Parliament, “Rise of the robots: Mady Delvaux on why their use should be regulated,” <http://www.europarl.europa.eu/news/en/headlines/economy/20170109STO57505/rise-of-the-robots-mady-delvaux-on-why-their-use-should-be-regulated>, 2017.12.07 参照。
- [2] 山本七平, “なぜ日本人にはロボットアレルギーがないのか,” 文芸春秋, Vol.60, No.5, 1982, pp.72-77.
- [3] 西垣通, “ビッグデータと人工知能—可能性と罨を見極める,” 中公新書, 2016.
- [4] Sakura, O., “Toward Cultural Studies of AI/Robot,” Global AI Narratives Tokyo Workshop Report, 2019.
- [5] Allison, A., “Millennial Monsters: Japanese Toys and the Global Imagination,” University of California Press, 2006.
- [6] 内閣府第5期科学技術基本計画, <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf>, 2016.1.22 参照。
- [7] 今田高俊, “複雑系とポストモダン—自己組織性論の視点から,” 今田高俊, 鈴木正仁, 黒石晋編著, “複雑系を考える,” ミネルヴァ書房, 2001, p.44.
- [8] 西垣, 前掲書, 2016.

- [9] 西垣通, “AI 原論—神の支配と人間の自由,” 講談社選書メチエ, 2018.
- [10] 須藤修, “人工知能をもたらす社会的インパクトと人間の共進化,” 総務省学術雑誌, “情報通信政策研究,” Vol.2, Nov.1, 2018, pp.1-10.
- [11] Takahashi, T., “Media, Audience Activity and Everyday Life—The Case of Japanese Engagement with Media and ICT—,” Doctoral Dissertation, The London School of Economics and Political Science, University of London, 2003.
- [12] Takahashi, T., “Audience Studies: A Japanese Perspective,” Routledge, 2009.
- [13] 高橋利枝, “デジタルウィズダム の時代へ—若者とデジタルメディアのエンゲージメント,” 新曜社, 2016.
- [14] Appadurai, A., “Modernity at Large,” University of Minnesota Press, 1996. 門田健一訳, “さまよえる近代,” 平凡社, 2004, p. 93.
- [15] The Royal Society, “Portrayals and Perceptions of AI and Why They Matter,” 2018.
- [16] CXO Talk, “Public Policy: AI Risks and Opportunities,”  
<https://www.lordclementjones.org/2018/08/21/cxo-talk-2018-public-policy-ai-risks-and-opportunities/>, 2018 参照.
- [17] 井上春樹, “日本ロボット創世紀 1920~1938,” NTT 出版, 1993.
- [18] 井上, 前掲書, p.27.
- [19] 西村真琴, “人造人間—ガクテンソクの生まれるまで,” サンデー毎日, 1928.11.4, p.29.
- [20] 西村, 前掲書, p.29.
- [21] 畑中圭一, “地球は人間だけのものではない—エコロジスト西村真琴の生涯,” ゆいぽおと, 2008, p.76.
- [22] 手塚治虫, “ぼくのマンガ人生,” 岩波新書, 1997.
- [23] 手塚, 前掲書, p.75.
- [24] 手塚, 前掲書, p.75.
- [25] Hall, S., ‘Encoding/Decoding’. In S. Hall, D. Hobson and P. Lowe (eds.), “Culture, Media, Language,” Hutchinson, 1980, p.135.
- [26] 西山禎泰, “日本におけるロボットの変遷と表現との関係,” 名古屋造形大学紀要 Vol.17, 2011, pp.151-166.
- [27] 米村みゆき, “アトム・イデオロギー,” 馬場信彦編, “ロボットの文化誌,” 森話社, 2004, pp.74-105.
- [28] Hall, 前掲書.
- [29] Hall, S., “The West and the Rest: Discourse and Power,” In S. Hall and B. Gieben (eds.), “Formations of Modernity,” Polity Press, 1992.
- [30] Harari, Y. N., “Homo Deus: a Brief History of Tomorrow,” Vintage, 2015. 柴田裕之訳, “ホモ・デウス—テクノロジーとサピエンスの未来,” 河出書房新社, 2018, 下 p.158.
- [31] Giddens, A., “Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age,” Polity Press, 1991. 秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也訳, “モダニティと自己アイデンティティ:後期近代における自己と社会,” ハーベスト社, 2005.
- [32] Thompson, J.B., “The Media and Modernity,” Polity Press, 1995.
- [33] Hall, S., “The Question of Cultural Identity,” In S. Hall, D. Held and A. McGrew (eds.), “Modernity and its Futures,” Polity Press, 1992.
- [34] Hall, S., “Introduction: Who Needs Identity?” In S. Hall and P. du Gay (eds.), “Questions of Cultural Identity,” Sage, 1996. 宇波彰訳, “カルチュラル・アイデンティティの諸問題,” 大村書店, 2001.
- [35] Takahashi, 前掲書, 2003.
- [36] Takahashi, T., “Japanese Young People, Media and Everyday Life: Towards the Internationalizing Media Studies,” In K. Drotner and S. Livingstone (eds), “International Handbook of Children, Media and Culture,” Sage, 2008.
- [37] Takahashi, 前掲書, 2009.
- [38] Takahashi, T., “MySpace or Mixi? Japanese Engagement with SNS (Social Networking Sites) in the Global Age,” New Media and Society, Vol. 12, No. 3, 2010, pp.453-475.
- [39] Takahashi, T., “Japanese Youth and Mobile Media,” In Thomas, M (ed.), “Deconstructing Digital Natives,” Routledge, 2011.
- [40] Takahashi, T., “Youth, Social Media and Connectivity in Japan,” In Seargeant, P. and C. Tagg (eds), “The Language of Social Media: Community and Identity on the Internet,” Palgrave, 2014.
- [41] Takahashi, T., “Creating the Self in the Digital Age: Young People and Mobile Social Media,” In Digital Asia Hub (ed.), “The Digital Good Life in Asia’s 21st Century,” Hong Kong, 2016.
- [42] 高橋, 前掲書, 2016.
- [43] 高橋, 前掲書, 2016, p.259.

- [44]Giddens, A. “Living in a Post-Traditional Society”. In U. Beck, A. Giddens and S. Lash (eds.), “Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order,” Polity Press, 1994. 松尾精文, 小幡正敏, 叶堂隆三訳, ‘ポスト伝統社会に生きること,’ “再帰的近代化—近現代における政治, 伝統, 美的原理—,” 而立書房, 1997.

### 著者略歴

高橋 利枝 (たかはし としえ)

2002 年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学. 2003 年英国ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)大学院博士課程修了 Ph.D.取得 (社会科学). 順天堂大学専任講師, 立教大学助教授, オックスフォード大学教育学部客員リサーチ・フェロー, ハーバード大学「インターネットと社会」研究所ファカルティ・フェローを経て, 2012 年早稲田大学文学学術院准教授 (2013 年より教授). 現在, 早稲田大学文学学術院教授, ケンブリッジ大学「知の未来」研究所客員研究員.